

むくや通信 27号
(1974.11.23)

解放後の朝鮮

一九四五・八月九月を中心に――

梶村秀樹

八月十七日・十八日の両日、梶村秀樹氏を講師として、夏季合宿講座を南きました。その内容のうち、李朝末期における資本主義萌芽の問題を「むくや通信26号」に掲載しましたが、本号には「解放後の朝鮮」を紹介します。尚、内容は多少短くし、文責は「むくや」の会にあります。

はじめに

解放後の朝鮮の歴史を南北いずれかの今日の立場から説明するというやり方は、それぞれの立場の違いによって、何が最も重要であるかとか、あるいは個々の事件の評価も全く異なるというよう難しさがあります。それで日本の歴史家の解放後の扱い方も、そのどちらかのものを選び取ってそれに寄りかかった話をする例が今まででは多かったです。たいていのが実情だと思ふのですが、どうもどちらかに完全に寄りかかってどちらかの一八〇度違うような話であつてはやっぱり落ちてしまふものがあるんじゃないかと思ふわけです。そこ

で統一朝鮮が未来に必ずあると考えると、具体的にそれがどういう形になるかは鬼も角、そこから振り返って解放後のことを考えた場合、今、南北それぞれで語られていることは違うものになつてくるだろうし、又そういう内容に歴史の見方も統一されていかなければならないということがあると思います。そういうことを考えて僕なりに解放史を考えてきたわけです。ですからこれは相当に討論が必要で、事柄で僕の意見だといつても聞いていただきたいと思います。

1. 一九四五年八月九月時期の持つ意味

解放後の朝鮮の歴史の特徴は簡単にいえば国際

的な条件が益々避けて通れない比重を持つようになってくるということ。国際的な関係というものがそれぞれの国の内部にすごく重大な問題を持ち込んで来る。それは避けられない事象であるわけなんです。そういう中で内側から生まれてきたものをどう実現していくのかという、内と外との矛盾が解放後の朝鮮の歴史の中では大きく影響してくる。ともすると外側から色んな影響が入り込んで来て、それがかなり圧倒的な比重を持つことで、従来から続いていた内側からの流れを消しかけてしまうことすらあつてくる。分断ということも基本的に外側から押しつけられたものです。しかし、単純に外側からというだけでなく、外側から押しつけられた力に進んで身を投ずることによって、自分の地位なり立場を確保するというような、いわゆる民族ニヒリズムというものも、内側からも出てきてこれと結びついてしまう。民族の志向とは切れたところからそれが出て来たりもするという複雑困難さが、非常に多い。つまり形で解放後には姿を現わして来たと思ひます。

つまり解放後の朝鮮の歴史は、国際的な直接の介入、そういうようなものが嫌おうなしにある中で民衆が何を望むか、それが外側から加えられる民

衆の望むものを押しつぶす力になつてくるもの。どうやって斗つてきたのかという歴史です。そして、その斗いの結果がどういう姿で現状にひびいてきているかということに結びついてくる。従って外力が民衆の望む方向を邪魔したということ。云うために、では民衆の望んだところは何かだ、というところを先ずきちんとおさえておかなければならぬ。それがかなり重要な問題です。

例えば李承晩政権は李承晩政権なりに「アメリカ」と手を結んで自由主義国家として進んでゆくことを民衆が望んでいました。そして、北の金日成政権は「そうではなくて社会主義を望んでいたのです。そして説明をするわけであつて、敢えてそういう云い方をするわけです。一応そういう立場というものを置いて、はたして重なる必要があるかというのを歴史の中で確かめる必要があるかというのを確かめ、そういう意味で朝鮮の解放後の民衆の望むところが一番ストリートに現われていた時期が一九四五年の八月から九月迄、本当に短い期間ですけれども、ここにそれが集中して現われていると云えないかと思うのです。この時期が非常に独特な時期であると

いうのは、八・一五で日本がポツダム宣言を受諾し、日本の総督府は叔威を失ない、実際にも殆んど弾圧を含めて機能が停止するようになった。一方アメリカはソ連が既に少し北の方に入っているわけですから、少なくともソウルを中心にして南の地域について云えばアメリカ軍もまだ入っていない。だから特にソウルを中心にする南において、この期間には全く外側からの力というものが消滅してしまつた時期なんです。その右アメリカ軍が入つて来ると早速アメリカ軍の利益に従つて色んなことを始めるわけです。直接に軍政を敷いてやつてゆく始める。軍政の中ではアメリカ軍が好ましいと思うものをウソと持ち上げて、民衆から支持があろうとなくろうとそれを盛り立てていく。こうということを行なうようになった。だからそれ以降の時期におこつた事柄は厳密にいうと、内部の民衆の望むものと表面に現われているものが決して同じではないということがあるわけで、それ以降、ずつと民衆の意志に心から目を傾ける政叔というものが解放後の南においては十分発展した時期が少ないということは事実だと思ふんです。それから逆に考えれば、四五年のこの時期というのは外側の影響にさらされにくい中で民衆が何

を望んだかということが、割に表面的にも文字通り出てきており、この時期に表面的におこつた事柄の中に何が民衆の望むところを知る鍵があるんじゃないかという風に考えられるわけです。

政治的にはその八・九の時期から既に南の中で、民族主義者の流れであるいわゆる右派と朝鮮共産党を再建した朴憲永が中心となつた左派とはかなりはつきりと違つており、それぞれ民衆の支持を得ようと対立しているわけです。勿論、何々の民衆がそういう左右どちらか一方だけをストリートに支持することは、相対的に少なかつたのです。が、漠然と左右それぞれが主張することについて判断する基準を持つていたと云えると思ひます。南の中絶家の趙秉世さんなんかは「左右の対立」ということだけに余り目を奪われず、民衆の考えていたことをそのまま見ることが出来るようになってしまつた。おそれもあるんじゃないか。左右が華々しくわたりあいましたということだけで解放後の正史をひらえてしまつたのは正しくないんじゃないか。四五年の時点から社会主義者と民族主義者は別れていましたけれども、その距離は意外と小さかつたということが云えるんじゃないかと思う。出発点では今ほど深刻な傷はなかつたんで

はないか。しつこいことを書いています。

今まで我々は左派がこう主張し、右派がこう主張したというふうなことで、正史の経過を整理して来たけれども、それだけでは不十分なんじゃないかということを感じているわけです。とりわけ四五年の八月から九月にかけての時期はそういうことの云える時期ではないかと思ひます。

2. 「地方人民委員会」と

「建国準備委員会」

そういう右も左も一切を含めて民族を代表する優れた人がひとつに結束して、社会主義的な民族主義国家ないし民族主義的な社会主義国家をつくるべきだと民衆が望んだんだと考えていいかという、基本的にはそういう風に考えていいだろうと僕は思ひます。実際八・一五から九月のアメリカ軍がやつて来るまでは、南も北も含めて同じような動きが進行していく。具体的に八・一五と同時に少なくとも日本の総督府の今まで眼みをやかつていた警察機構なんかが一掃になつてしまつたわけですね。それに替るものを自主的に作らなければならぬということ、大體、都ごとですけれども、何らかの意味で朝鮮人が地方の行政というか政治を自分たちの手でやつてゆく為の機関と

いうものが、日常生活の中のものとなつた単位である郡を中心にして生まれてくるわけです。「人民委員会」、「自治委員会」など色んな名前をそれぞれ思い思いに名乗つて、いわゆる自然発生的なものといえると思ふんです。一つのガツンとした組織が、例えば朝鮮共産党が中央から指令を出してそれに従つて地方ごとに生まれるという仕方ではなく、期せずしてその地方の民衆が、別に選挙をしたわけでもないけれども、自分たちの為になつた自治団体を構成してゆくということを早速やり始めたんです。このことにはある意味では当り前だという風に思えますけれども、例えば日本で八・一五後にアメリカ軍が入ってくるまでの間に、そういうものを作つて軍国主義が崩壊したんだからそれと替わる国家を作り出していいじゃないか、というふうな動きが出てくるという雰囲気はないわけですよ。それは日本の民衆の場合、軍国主義が精神の内部にまでかなり影響を与えていた為、口も今まで信頼しつづけていたものが倒れてしまつたということ、ポソリしている。ポソリしてはいた。たのは在日朝鮮人運動で、朝鮮の本国の運動とある意味ではタイアップするような

形で、日本の中でもいち早く動き始める。その意味で、地方の「人民委員会」、「自治委員会」といったものが、自然発生的に誰が命令したということなしに生まれたことは非常に注目すべきことではないか。アメリカの占領軍なんかは、その后やって来て「朝鮮人には自治能力はない、軍政を敷いて、民主主義国家に導いてやらなければ朝鮮国家は独立出来ないんだからアメリカの指導に大人しく従え。」という態度を打ち出すわけですよ。朝鮮人には自治能力ナシというふうない方が広まったものだから、日本人の中にはそんなもんなんだと思ってる人間が、今でも結構少なくないと思うんですけれども、朝鮮人のこの時期に比べてみると日本人の八二五の通え方は、やっぱり耻かしくなってくるわけです。

地方でそういう動きが現れたと同時に、大工場等では工場の労働者が工場管理委員会とか工場の人民委員会とか、これ又、名前は色々ですけども、自主的に生産を管理してゆくための機構や制度をそれぞれ作り出しているわけです。その上に立ってやがてアメリカ軍が進駐する前に、ソウルで取り敢えず地方の代表者が集まって朝鮮人民共和国の設立を宣言した。アメリカ軍はこれを全

く否定する。ソ連も黙殺する。それでそのまま口を消えになつてしまふわけです。

経過として云えば八二五と口に全国的なレベルでは日本の総督府の支配者が、一刻も早くむしろ朝鮮人にいけば行政権を引渡して逃げ帰らなかつと、かなりそういつた浮き足だち方をしていた。その関係で八二五の直前、朝鮮の当時の主だった朝鮮内にいた人の中で、人望のある人を総督府に呼んで引渡したいと持ちかけるわけです。呼ばれたのは、どちらかといえば左派を代表する呂運亨、それから東亜日報なんかの右派の中にいる宋鍾奭の二人で、総督府は「行政権を移譲するから例えは都市の秩序の維持などを確立して欲しい。」というふうな話をしたわけです。その時右派の宋鍾奭の方は断つたが、左派の呂運亨の方は「いいです。やりましょう。引渡しましょう。」というんで引渡した。但し、呂運亨は条件をいくつかつけた。第一に、今、現に総督府が警察の中にあるいは刑務所の中に捕えていた民族運動をやつた人々を全員、直ちに釈放しろといふ。それから自ら秩序維持機関を作るから認めろ。総督府側は、朝鮮民族の積り積った憤りがどう爆発するかを、その時点ではすごく恐れていたもので、これに

従つたわけです。

そこで、朝鮮人自身がやがては国家機構に発展していきけるような団体を早速組織するわけです。それが建国準備委員会です。建国準備委員会では節を曲げないで民族的抵抗を続けてきた人達が重要な役割をはたしている。そういう力も含めて呂運亨は建国準備委員会を組織して、ソウルでは学生を動員し、工場では工場管理委員会みたいなものが出来、保安隊と云われているものを作り出して、そういう役に当たる。当時ソウルに日本の敗戦時まで任んでいた日本人は結構いるわけですけども、そういう人たちが話を聞いてみると、実際、保安隊の学生が腕章を巻いて、例えば「無秩序的に日本人に報復することはいくなくないことである。しど説得するなどの活動を街頭でも進めているわけです。

呂運亨は総督府から権限を引き継いで、建国準備委員会を組織していったわけですけども、実はそれが非常にスタートが早いわけです。その理由には、呂運亨という人はずっと民族運動にかかわつてきた人でそれ以外にも、彼は一九四三年の暮頃から既に日本がやがて敗戦するであろうということを予測して、準備活動を始めていることがある

ようです。建国同盟っていう名前でも、そんなに規模なものじゃなかったわけですけども、そういうものがあつたから早速その人たちが相談しながら、更に新しい人間なんかも加えて一つの機構を急速に整えていく、学生の組織までを新しくつくり出してゆくということが出来たわけです。

そして結局、中央には建国準備委員会というものがあるが、準備委員会ですから別に永久的なものではないんですが、そういう動きを始める。同時に地方では、それが人民委員会という形で現れてくる。その二つが結びついた形で、やがて一つのものになつてゆき、アメリカ軍が入ってくる前に朝鮮人民共和国というものに一応整えられていくといえるでしょう。そこで人民共和国という固駐に入る前に、それじゃそういう地方人民委員会というものは一体、どういう性格のものだったのかというところに目を向ける必要があると思います。

ス、地方人民委員会」の性格

大まかにみて、地方人民委員会の性格は主義主張、イデオロギーでいえば、色々で、郡ごとに違つていていつていい位なわけです。つまり例えれば解放前から朝鮮口産党の運動に關わつてい

たとか、あるいは新幹線の運動にそういう立場で
関わったとか、そういうような人が、一書した活
動の態勢を養って来たような部では、それらの人
が中心になる。一方そうではなくて自治運動のよ
うな、ちよつと曖昧なまま、しかし、戦争協力と
いう立場に屈服はせずに頑張ってきたマルジョア
民族主義者がいて、そういう人の評判が高いよう
な部では、その人を中心にして人民委員会が生ま
れる。後者は、人民委員会ではなくて、自治委員
会という名前を名乗っている場合もあるわけであ
れども。郡といえはそんなに大きな単位じゃな
いわけですから、郡内でこれから生まれてくるべ
き自分たちの国をまかせるべき立派な偉れた人は
誰かというのは、誰が見てもかなり明白なことだ
ったといえると思います。つまり、日帝に対して
民族的なものを、運動としては実際に出来なくて
も、少なくとも思想として正しく維持して来たか
どうかという極めて単純明解な基準で判断が下り
れたからです。だから多くの著名な人の中で、日
本に協力したような人たちは、解放後は政治の表
面に現われることはできないわけです。例えば中
央の有名な人で三二運動の時には力ク力クたる役
割をはたす、崔南善とか李光潑も戦争末期の体験

の勢に、むしろ追及をうける側であつて、解放
後の独立した国家の中で、自分の能力をいかすこ
うなことは、思いもよらない状態なんですね。そ
れに比べ、曲りなりにも、例えば自治説のような
多岐的、改良的な道をとった位のことにはあつた
しても、消極的には抵抗を続けたものまで含めて、
兎に角、抵抗の姿勢を貫いて来たものであれば、
その人たちは偉れた人たちであるという風に、こ
つに大まかに分けてものを考えていたと思ふんでは
、では、そういう範囲の人たちはどういう主義、
主張を持っていたかといえは、いわゆるマルジョ
ア民族主義者である場合があり、両方あるわけ
です。どちらがより多いかといえは、マルジョア民
族主義者には屈服してしまつた部分があつて、そ
れだけ少ないわけであつて、あるいは抵抗の仕方
も、割にスレスレの抵抗というのが多いわけです。それ
に比べて、マルクス主義者は、弾圧の仕方を選
んでいたわけですが、殆んど大部分牢屋にお
り、牢屋にいない人にしても全く息をひそめて生
活をしているというような状態であつたといえま
す。だから日帝と比べただけで、たかといふ基準を
当てはめてゆけば自ずから左派の方が評価が高く
なるということが、自然の流れとして生まれてく

るといふ雰囲気ではなかつたかと思ひます。しか
し地方ごとには一概にはいえないわけで、半分の
りは少ないかもしれないけれども、マルジョア民
族主義者が中心になつた自治委員会や、人民委員
会も結構あつたわけです。ですから、民衆が何を
願っていたかといえは、要するに左右を通じて、
民族的利益を守つていくような、そして社会改革
を行つてゆくようなものが望ましいと思つていた
といつていいと思います。そういう願望が、選挙
を通じてなくても自ずから一つの形をとつたもの
として現われてくるわけです。その時期の姿につ
いて具体的に物語った資料については、如何にそれ
が強い力を持つていたかについては、例えば、
マークザインの「ニッポン日記」という本があり
ます。その巻末のごく一部で数頁の頁のものです
けれども、当時の南朝鮮についての実に生々しい
見聞録があります。例えば、アメリカ軍が如何に
苦労しているか。如何に民衆から人気がないかと
いうようなことが、色んなエピソードで出ていま
す。アメリカ軍が人気がないのは何故かという
民衆の要望を得て出来上がったものを片端か
らつぶしているからで、素直に朝鮮の民衆に好か
れる害がありまじい。地方人民委員会というもの

をアメリカ軍は認めないという方針は、当初から
出されているんですけれども、それが一年位経つ
ても地方社会では陰然とした力を発揮している。
地方人民委員会というものが、実質上「影の地方
行政機関」の役割をなおはし続けている。農民
が支持をそちらに寄せている。この本は、このよ
うなことを報告している内容のもので、
それから、軍事政権のできた時に一番先に、こ
れは間違つていてということ、公然といつた人
に、威錫憲（威錫憲）という人がいます。威錫憲さんの経歴
はこうなんです。彼はもともと北の出身の人だ
し、解放直後は北にいたわけです。解放と口にま
わりの人望が高くて一番北のはずれの新義州の自
治委員会の委員長（委員長）の役割を担つてつとめてい
るんです。南ではなくて北ですから連軍が入つて
くるような条件の中で生まれた人民委員会が、例
えば、口産主義者ではない、純粋にクリスチャンで
ある威錫憲さんなんかを中心にしてつくり出され
るといふようなことの中に、左派でなくて、クリ
スチャンのような人でも、人望のある人は人民委
員会を中心的な役割を、この時期には、はたし得
るといふ実例が現われていると思ひます。ソ連軍
進駐下で、新義州の人民委員会の責任を負つと

いうことは、こういう経歴からして難しいわけですね。特に真相は定かではないんですけれども、キリスト教系の学生と連軍がぶつかってしまおうというような「新義州事件」があつて、辛い立場だつたと思います。拘束されたつもりでいるわけですね。それから暫くして南へ下つてきたんです。普通ならば咸錫憲兵という人はコチコチの反共主義者になる筈のところの人なんです。その人がむしろ存知のような思想を軍の中で民衆の言葉で語っている。そこが咸錫憲兵のスタイルの大きなところ、信じたなと思います。咸錫憲兵が南へ移つてきたのは、当時の南の民衆が一番見難い状況の下にあつた。その人々と共に歩むということが、自分のクリスチャンとしての使命だという考えを持ったからなのです。

そういう咸錫憲兵のような人が正しく選出されているわけです。少なくとも解放後の新義州の市民は彼を選び出している。そのことを注目すべきだと思ふわけです。具体的な例を挙げましたけれども、もっと無名なことまで含めて多くの朝鮮の地方は、そういうことであつたと思います。左右を固めずということ、何々人は左右いずれかを支持するという意見は多少はありしている

人もあつたけれども、全体としては左派のものでも右派だから退けるといふことはなく、右派のものでも左派の指導者をいただくといふことを必ずしも拒否しないという形で、地方人民委員会というものが生まれてきたといえると思います。

4. 朝鮮人民共和国

そういうものを反映して、朝鮮人民共和国というものが現れます。地方の人民代表が集まつて九月六日にソウルで大会を開き、朝鮮人民共和国を発足させ、綱領、基本方針を決定したり、国家の基本的な行政機構、内閣や中央人民委員会のメンバーを、大会の名で選出するんですね。それが朝鮮人民共和国憲法として、最近の文獻などに資料として出てくるものなんですけれども、その憲法名を見ますと、面白いです。主席は李承晩ですね。憲法の中には朴憲永が入つていませんけれども、朴憲永と一緒にやつてきたような人々が何人も憲法に入っている。勿論、呂運亨は副主席。上海臨時政府の金九は内政部長として選出されている。又、金日成はやはり選出されておりますけれども、人民委員会の委員でした。おそらく年々上、若いという配慮があるのかと思ひま

す。要するに李承晩から金日成まで、およそ当時ソウルで知られていた、働いた活動経歴を残した人は全部、憲法名簿の中に入つていて、後から考

えると驚くべきほど多くの憲法名簿なんです。後の歴史家の中では、李承晩と朴憲永、あるいは金日成が一緒にやつていくなんて、そんなことを考へていたのは現実性が無いじゃないかというよ

うな意見もありますが、僕は必ずしもそうは思わない。その憲法名簿についてのは、当然国内にいた人たちが選んだわけで、選ばれた人たちの多くは、国外に

いるわけですから、別に「選出」してしまふ。就任して下りて、こういう約束をしてから選んだんじゃない。その選出方は、地方人民委員会の選出方と非常によく類似している。だからそれは、現実性の問題がらういへば、その内部に非常なイデオロギー的対立性を含んでいるけれども、民衆がこの時点において、どんな国家をつくり、その中心になる指導者はどういう人たちであるのかについて何を望んでいたのかを割に反映しているといふ意味で、民衆意識に根ざした憲法名簿であるといふ一面があると思ふ。そのことは民衆が抽象的であれ一つの意志を持つて、それだけのものを選ぶ、そういう段階が成熟していた

そして、そこには以上のことを考えても、民衆が何を望んでいるかが割にストリートに表現されている。そのことが重要だと思えます。地方人民委員が早速生まれ、そして最後に人民共和國というものが生まれるというような動きが、外側からの介入がない中で、朝鮮人民の力で進行してゆく。そこに表現されているものは、勿論統一を自明の前提にしているわけで、南北一統、そういう国家を作り出すんだという、今日の統一の思想に連なるような形も、思想としてストリートに表現されていることが、いろいろな点で思えます。

5、米・ソ占領策と南北の分断

こうした朝鮮民衆の意向に対し、外側は何をやってたかということが問題になってくるわけですが、これも、アメリカ、ソ連、それぞれに自分の国の利益に添ってどういう風にやったか有利かという観点から、朝鮮に対する占領政策を行いました。ソ連より、とりわけ利益をゴリ押ししたのはアメリカでありました。何故かという点、人民委員会は、大体左派が強く、ソ連に割に通じる人たちが多いのだから、ソ連はそれを認めればいいじゃないか

という態度を露骨的には持つことが出来るわけですが、ところがアメリカ軍は、アメリカの利益と反する左派が非常に強力であって、ソ連を利用するようなことを民衆が望んでいるらしいというので、早速ゴリ押しの弾圧を進める。その経過の中で、アメリカに対して非常に依存度が高く、いうことを言わせることのできる指導者として、李承晩を選んだ。李承晩こそ朝鮮の民衆の代表として素晴らしい人だと思われ、彼を南朝鮮がソ連で選挙を行って政權につける形で、分断国家を結局一九四八年に先ず南につくってしまう。国家の分断は、ここで十分に話し合えないと思えます。結論的にいえば、アメリカのやったことはやっぱり論議の余地なくひどいでしょう。朝鮮民衆が何を考えているかということを全く考えなかった。南はすぐ悲惨なことになる、それとの抗争の中で、四六年から始まる左派、後に南労党を名乗る指導部と関係のある斗争が展開してゆくわけですが、それから例えは、金九のような反共的民族主義者すら、統一の為に危険を冒して活動を行な

い、李承晩を批判し、暗殺までされてしまうという形になる。李承晩と金九の対立は同じ民族主義の陣営の内部でも、内側の力を重視するが、外側に依存することでもう一つ違っていき、結局のところ、根本的対立が、そういう姿で現れてきたと考えていいと思えます。

アメリカ軍が何をしたかについて、ごく簡単にいえば、先ず、九月八日に進駐すると軍政を宣言し、人民委員会や人民共和國は一切否定するという方針を、ゴリウラ出します。それから、米英ソ三国外相公設で信託統治方針というものが決定されます。

信託統治方針とは、アメリカとソ連の合同委員会というものをもうけてそれが当面最高権力をになり、やがて来るべき独朝鮮政府が生まれるまでの過程を「めんどう」を見るという決定なんです。それ自体ある意味で朝鮮民衆に対する押しつけで、そのことに対して反対がおこったわけですが、それでも、それをアメリカが愚実に守っていたならば、まだしもその後の過程はあれほど悲劇的ではなかった筈です。しかし左派が非常に強いから、信託統治を守っていたのではアメリカに不都合な政府がでるということで、アメリカはそれを

やめにしてしまいます。そして無理難題をふっかけ、米ソの合同委員会を結局、決裂してしまいうわけです。次に国連に問題を持ち込みます。当時の国連というのは、アメリカが圧倒的に勝つに決まっている場所です。そこで国連はアメリカの都合がいい自由選挙を経て、朝鮮が独口を回復すべきだという決断を簡単にしてしまう。それを錦の御旗として、アメリカはソ連軍にあるいは北にアメリカ軍の責任の下での選挙を提案します。それを押せば、アメリカ軍が南でやっていることが北にまで及ぶということで、ソ連軍としては当然拒否する。そこでソ連軍が拒否したという口実で、南だけで単独選挙に切りかかっていく。そういう風にして、アメリカは親米政權を南の中に民衆の支持なしに作り出してゆくといったといういふことがあつたわけですね。

それに対してソ連はどう対応したか。アメリカはどの罪ではないんですけれども、朝鮮民衆の意向をそのまま素直にストリートに反映し、最大限の努力を傾けたかという点、疑問があると思えます。少なくともソ連の方がどうもフに落ちないところがあるわけですね。

それから話は少し戻りますけれども、三八度

線設定の固執もそうです。三八度線は、アルタタ
談で密約があったという説が今までかなり通用し
てたんですね。ところがアメリカで二三年前公表
された米ソ間の外交文書によると、三八度線確定
はアルタタではなく、ずっと後なんです。ソ連参戦
の時期に米ソが朝鮮を分割占領するという折衝が
進んでいるわけで、前々から決まっていたことじ
ゃないんです。ハ一五直前の時点でアメリカは戦
後の米ソの対立を予想して、できるだけ有利に戦
線を広げてゆく為には朝鮮に最低足掛かりを持たな
きゃいかんと思うわけですが、ソ連の方は国境を
接しているのが朝鮮に早くも入っている。このま
まではソ連軍が釜山まで占領するという形に進ん
でいくに違いない。これを何とかしてアメリカ刀と
すれば阻止したいという事で、先ず話を持ち出
してみようというんで、目一杯アメリカ刀に有利
なものとして三八度線による分割占領案を、ソ
連はのむまいなあ、と内心思いつながら持ち出して
いるわけですね。それで折衝して「そこからは
わからないが、アメリカ刀としても最大限頑張っ
て駄目ならはソウルの南に線が引かれてもしょうが
ない」という態度で臨んでいます。ところが思い
の外ソ連は、それがよかったが寝かされたが別向

赴ですけれども、三八度線をあつかりのんじや
うわけですね。要分ソ連の目はやはりヨーロッパの
方に大きく回っていて、アジアは中国があったに
いもあって、大して固執にしていなかったとい
うようなこともあるんじゃないかと思うんです。勿
論これは米ソそれぞれ勝手に線をひくあうとい
うことで、どう決まったって悪い固執であること
は間違いないですけれども、そういうことに現れ
ているように、ソ連は解放后においても朝鮮問題
についてはどうもヘンです。朝鮮戦争の時はず
っとヘンですけれども、そこまではふりか
ま

次にソ連のそういう対応と、朝鮮のコミコニ
スとたうとの対応は、この時期にはどうだったのか
ということになります。ある意味では民衆の願望
そのものとはやはり少し違って、戦前米のコミ
ニストたちは、例えはその時点では社憲永も金日
成もそんなに大々な違いはなかったと思うんです
が、ソ連の指示にかなり重きを置くというが、そ
れに盲目的には従うという枠組みで、ものを考え
ていたと思います。つまり北の内部にも、民衆の
意志、民族的なものよりも、ソ連の指示がかなり
大きくものをいうような精神状況はあったとい

づるを得ないだろうと思います。北の中のコミ
ニストが、コミコニストなりに民族と階級の固執
をどう考えていくかということが、試された時期
であるといえると思います。民族的なものを尊ぶ
うとするものと、それに反対して外側の力と結び
つこうとするものの間で、又、白人の中でもそ
の両側面があつて、葛藤を重ねていくわけです。
その葛藤は、ある意味では今日までの南北それぞ
れの歴史の歩みそのものでもあるんじゃないかと
思います。

お知らせ

ハパンフ

◎新幹会研究のためのノート 榎村秀樹

「労働運動史研究」四九号

学習会用コピーが残っています。入用の方には
実費(百円)でおわけします。申し込みはむく
けの会まで。

◎「むくげ通信」七四年度分(二二一・二七号)を
合本にしよした(限定百部)。一 三百円(送
料別)。申し込み受け付けます。

ハ集 会

◎神戸・朝鮮史セミナー「朝鮮文化と日本」

十二月十四日(土) PM七時〜九時 夢野セミナ

「朝鮮近代文学と日本」 金時鐘氏

◎大阪・朝鮮史セミナー「朝鮮史の見方」

十一月三十日(土) PM六時より 市立労働会館

中世 善在氏

十二月七日(土) 近世 中塚明氏

ハ新刊「最近朝鮮関係の本がいろいろ出
版されています。その一部を紹介いたします」

◎「本名は民族の誇り」 金容海著(おおぞら
書房、七五〇円) むくげの会でも取扱います

◎「韓国言論抵抗史」 高峻石著(二月社、一
三〇〇円)

◎「アリアン峠の女」 高峻石著(田畑書房、
一、二〇〇円)

◎「死ぬまでこの歩みを」 成錫憲著(新教出
版社、一、四〇〇円)

◎「鎮魂の海峡」消えた被爆朝鮮人徴用工二四
六名 深川宗俊著(現代史出版会、九八〇円)

◎「朝鮮人強制連行・強制労働の記録」(現代
史出版会、三、〇〇〇円)

◎「法學セミナー」臨時増刊12月、韓国の人権弾
圧と日本(九〇〇円)